
女探偵 見津崎 香苗

笹松 梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女探偵 見津崎 香苗

【Nコード】

N7763Q

【作者名】

笹松 梅

【あらすじ】

女探偵 見津崎 香苗と推理オタクの助手 田山 香織の物語。

女探偵 見津崎 香苗は探偵業を全くやらずに、タレント業ばかりをこなす、超現金至上主義！！

近年の書籍化のブームに乗り。小説を出すことに。

しかし！先の、タレント業の多さからマスコミから小説はフィクションだと疑いの目を向けられてしまう。

それを受け、見津崎は実際に事件を解き明かし、その事件を小説にする妙案???を思いつく。

助手であり、マネージャーであり、ゴーストライターであり、この物語の主人公である 文科系メガネ推理オタクっ娘 田山 香織 を連れ【渋谷 風俗店 女性失踪事件】の解決へと乗り出した。

果たして、無事事件解決となるのか??
コメディー推理小説。

女探偵 見津崎 香苗

『犯人はこの中にいる!!』

ドラマなんぞではよく聞くチープなセリフである・・・

『そうっ!! 犯人は貴方よっ!!・・・』

はい。 お見事! 事件解決!!

- - - - -

【リアル??? 金田一現る!? 女探偵 見津崎 香苗】

2年前、、私が高校3年生の時だった・・・
この見出しが或るスポーツ紙の一面を飾った。
父が毎日、朝食の時に見ているスポーツ新聞だ。

「へえ、迷宮入りの難事件を見事解決。ふん」

と、父得意の記事の朗読が始まった。いつからか分からないがもう癖付いてしまい、これが父の日課となっている。

誰に向けるわけでもなく語られるそれは、隠居した老人が喋り相手も全く見つからず、終いにはテレビに話かけ、まるで向こうからも話しかけられているように頷き首を傾げるそれと同じだ。

いや、それよりもたちが悪い・・・てか、オッサン臭い。

勿論、いつもならば(はいはい)と心の中で思うこともせず、右か

ら左へと聞き流す。

長年、嫌でも耳に入ってくる朝のゴシップ情報は私にとって小鳥の囀りと同じ様なもの、情報として脳が処理をしない。

しかし、この日ばかりは違った。

「何々？女探偵 見津崎 みつさき 香苗 かなえ 24歳、10年前におき迷宮入り

していた連続強姦事件を解決。当時の資料を集め独自の捜査で犯人像を絞り出し、警察へ情報提供。それを元に捜査開始、犯人逮捕に大きく貢献！！へえゝすごいねえゝ若いのに」

40過ぎ初老鳥のいつもの長い囀りは、私の中で情報へと一瞬で変換された。

『ちよつと』と強引に新聞を奪い取り、食い入るような眼で記事を読んだ。

【（私は当時14歳でしたがこの事件を鮮明に覚えています。多くの女性が被害を受け、涙を流されました。絶望のさ中、自ら命を絶ったかもいらっしました。しかし！この事件は僅か2年で迷宮入りし。犯人だけがノウノウと普通の生活を送っているという事実。それが許せませんでした・・・・・・）】

胸に衝撃が走った。

漠々と脈打つ心臓。自分でも感じ取れるほどえらく興奮していた。

「私、探偵になる！！」

鳩ならぬ初老鳥は豆鉄砲を食らった。

女探偵 見津崎 香苗

【中学１年生の夏休みに読んだ探偵物の推理小説が切っ掛けだった。それまでいいところ恋愛小説程度しか読まなかった私だが、推理小説特有のドキドキ感にハマってしまい、それからその後の夏休みは当然さらにはその後の学校生活の殆ども推理小説に費やした。

おかげで、友達も余りいない、恋もしてない、青春なんて眩しすぎるっ、夜もベッドのライト一つで小説を読み漁って視力低下。

図書室の一角を席取った文化系少女はメガネを掛け、女子力を磨くよりも読書力と推理力に磨きをかけた。

人や物によって読み方は変わってくるが、私は物語に入り込むのが好きだった。

まるでその小説の中の主人公は自分かのように、トリックを解き明かし、真犯人を推理し追い詰めた。

読むというより、まさに入り込む。冥利に尽きるとはこの事！

自分で言うのもなんだが、頭の回転良さには自信があった。

大の勉強嫌いだったが、テストも要領良く前日の一夜漬けで詰め込んだ知識だけで平均点程度は取っていた。

それゆえか、読みの浅い、並みの推理小説ならば犯人を暴くのは容易に出来た。

そのうち、『いずれは私も』と推理小説を書く作家でなく、物語に出てくるように本物のそれでありたいと思い。それ冊数を重ねるほどに想いは強くなっていた。」

カタカタ・・・

「ちょっと、みして・・・」

『香苗さん』がパソコンを覗き込む。

「何これ???私の話じゃないじゃん。田山!これあんたの話でしょ?」

「だって・・・香苗さんの小さい時の話っていわれても・・・そもそも、何で私が・・・」

「探偵になるはずだったのに・・・こんな・・・小説書けだなんて・・・」

「グタグタ言うんじゃないよ。これも助手のお仕事・お仕事」

簡単に言う。お仕事お仕事。語尾に♪マークつきのテンションだ。

田山 香織(わたし)は毎度のように反論の言葉を飲み込んだ。

私は高校の時に女探偵の見津崎 香苗に触発され一朝にして探偵になる事を決断した。

豆鉄砲を食った父を、マシンガン銃のような勢いで半ば強引に説得し。

高校を卒業すると同時、母の応援と共に地元を出て上京した。

その足で東京の高田馬場にあった、女探偵 見津崎 香苗 事務所
に助手にして貰うべく門を叩いた。

意外にもあっさり、見津崎 香苗は私を助手として招き入れてくれた。

それから、紆余曲折の2年間。

助手というか・・・唯のマネジャー!。

見津崎はあのスポーツ新聞に載った事を勢いにタレント業を始めた。彼女のどこか人を皮肉った饒舌具合と反比例した美しい容姿はお茶

の間の心をぐつと引きよせ、今ではお昼のコメンテーターとして欠かせない存在にまでなっていた。

現に私が書かされているこの小説が『初書籍 女探偵 見津崎 香苗』とニユースでしつこい位に取り上げられている。

「て、ていうか、そつ、そろそろ探偵業やないと不味いですよ。ネットは愚か週刊誌なんかでも【女探偵 見津崎 香苗の小説はフイクション!!】なんて、叩かれてますよ」

私が、助手に付いてからの2年間。実際に探偵として請け負った仕事は僅か2本。

見津崎人気に本格的に火をつける要因となった、特番のスペシャルドラマの元となった殺人事件が一本と。

関西を中心に人気の高い探偵番組。探偵ナイトスクープの探偵役の疑惑の一本だ。

見津崎は女性の味方のスタンスを武器に絶大な女性からの人気がある。

一部では信者かしているものもいるぐらいだ。

しかし、その一方。最近では探偵業は疎かにしているとテレビや評論家に揶揄されることが目立って来ていた。

「う、このままじゃ小説の売り上げも・・・わかんないですよっ」

この、恐る恐る発した言葉が仇となった。

確かに、それは困るなといった顔をした直後。

見津崎は手をポンツと叩いた。よほどのことでも思いついたようだ。「良い事考えた、ここで何かの事件を解決してさ、それを小説入れちゃおうよ」

「えっ！……！……ほ・本当ですか？」

探偵業がしたいとこねていた私に、それだけではやっていけないと一断されて以来、しょうがなしにマネジャー業に取り組んでいた私は、久しぶりにありつけた餌を目の前に心躍らされた。

「それが、一番でしょ！週刊誌なんか黙らせてアツと言わせてやるわっ」

言葉の勢いそのもの、早速たんまりとたまった探偵依頼書に目を通し始めた。

「ふん・ふん。」

またも、音符！鼻歌交じり。

思ったことは即行動、即発言。

私の元来の臆病小心者の性格に拍車を掛け。

これさらに、ヒステリックな一面を引き出させたのは紛れもなく彼女の我儘な性格のせいである。

「よし、これにしよう」

見津崎が一枚の依頼書を私に手渡した。

【渋谷 風俗店 女性失踪事件】

いかにも。小説にするにはもってこいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7763q/>

女探偵 見津崎 香苗

2011年3月10日16時23分発行